翻訳

ヘーゲル『精神現象学』饒舌訳の試み　2

原崎　道彦（高知大学教育学部）

A Trial to Translate Volubly Hegel's "Phaenomenologie des Geistes"　2

HARASAKI Michihiko

Faculty of Education, Kochi University

ABSTRACT

I translate from page 287 to page 322 of the original text.

【２８７】

B　理性となった自己意識がみずからをどのように現実化するか。

自己意識は、物は自分であり、自分は物であることを見いだした。つまり、自己意識そのものが対象として存在する現実であるのだということが、自己意識に意識されるようになった。自己意識は、自分は実在するもののすべてなのだということを確信しているし、その確信はたんなる確信のままの確信ではない。意識に見いだされたままのものとしてあったものがことごとく、廃棄されたものという形式のうちにあるものとなっており、その結果、それが自己意識にとって対象としてあるとしても、表面的にそうしたものとしてあるに過ぎず、それの内面および本質は自己意識そのものとなっている。―こうして自己意識は対象に肯定的にかかわることになっているわけだが、その対象とは、自己意識なのである。もちろん、対象は物という形式をとっており、自己意識に対して自立したものとしてある。けれども、自己意識は、自己意識に対して自立して存在している対象が自己意識にとってよそよそしいものではないことを確信しているし、あわせて、自己意識そのものが、自己意識の対象である他者によって承認されていることも知っている。このとき自己意識は精神となっている。つまり、自分が自分と他者とに二重化し、それぞれが自立したものとなりながらも、自分自身との統一をたもつことができていることを確信している。が、それでもそれはまだ確信でしかないし、確信は、自己意識のほんとうのあり方へと高められなければならない。自己意識がそのものとして存在するものであり、自己意識の内なる確信どおりのものであるということは自己意識にとっては当然のことなのだが【２８８】、それが、自己意識が意識する対象となり、自己意識に対して外なる現実とならなければならないのだ。

自己意識がそのように現実化してゆくさいにたどることになる諸々の駅は、常に決まっており普遍的なものとしてあるが、それがどのような駅であるかについては、これまでの道のりと比較すれば大雑把なことは明らかとなる。すなわち、観察をおこなう理性は、かつて意識がくりひろげた運動を、すなわち感覚的確信、知覚、悟性を、カテゴリーを元素としながら繰り返したわけだが、同様に理性はこれから再び、かつて自己意識のくりひろげた二重化した運動を経てゆくことになり、他者に対して自立しようとあがきながら、自由を手にいれてゆくことになるのである。そのあたりのことをもう少し詳しく見ておくと、観察することをやめて活動的となった理性が最初に意識するのは、自分はひとりの個人でしかないということなのであり、ひとりの個人でしかない自分が他者のうちで現実となることを要求し、それを実行しようとすることになる。―その後、個人が普遍的なひろがりをもったものへと高まることによって、個人は普遍的な理性となり、自分が理性であることを意識するようになる。つまり、自分はそのものとして自分のちからで既に承認された存在となっており、自分がそのことを純粋に意識するとき、そこではすべての自己意識が合一されてひとつになっている、ということを意識するようになる。そのとき個人は単純で精神的な存在となる。それは純粋な意識のうちにあるものであると同時に意識の対象ともなるのであり、それによってそれは実在する実体となる。それは、これまであらわれた諸々の形式の根底にあったものなのであり、これまであらわれた諸々の形式はそこへ向かって還ってゆく。そのとき、これまであらわれた諸々の形式は、根底にあるものの側から見れば、根底にあるものが生成するためのたんなる個々の契機でしかない。それらの契機は、確かに、ひとつひとつがばらばらになり固有の形態をまとってあらわれる。けれども実際には、それらの契機は根底にあるものによって担われたものであるに過ぎない。個々の契機は、人間のいとなみとなり、諸々の人間がくりひろげる現実となるが、それらがそのほんとうのあり方をするのは、根底にあるものそのもののうちに存在し、そしてそこにとどまるときだけなのである【２８９】。

意識の歩みがこれから目指すゴールはそうした根底にあるものなのだが、それは、学的な立場から意識の歩みを観察している我々にはすでにおなじみの概念である。つまり、他の自由な自己意識によって承認された自己意識である。他の自由な自己意識によって承認されているがゆえに、この自己意識は、他の自由な自己意識が自由な自己意識として存在しているそのときに、自分が自分であることを確信できるのであり、他の自由な自己意識が自由な自己意識として存在しているそのときに、自己意識としてのほんとうのあり方をすることができるのである。意識の歩みが目指すゴールはそうした概念なのである。―そのゴールがどのように実在するものであるかを、学的な立

場にいる我々の立場から見るならば、つまり、我々が意識にとってはなお内なるもののままである精神を、諸々の人間のいとなみがかたちづくる実体へと拡大するならば、この概念からすがたをあらわすのが、人倫の国である。というのも、人倫とは、諸々の個人がそれぞれ自立した現実として存在しながら、諸々の個人のそうした存在が精神的には絶対的に統一されているということに他ならないからである。自己意識がそれそのものとして普遍的なものとなるとき、その自己意識は他の意識のうちでも現実的なものとして意識され、他の意識にとって完全に自立した存在となっている。つまり、他の意識にたいして物として存在している。が、それと同時に、その自己意識には、自分が他の意識と統一されたものとしてあるということも意識されているのである。自己意識どうしのそうした統一が人倫的な実体なのだが、それの普遍的な面のみを抽象してしまうと、それは、どうあるべきかを考えて定められた規則に過ぎなくなってしまう。しかし、人倫的な実体は、単にそうしたものであるのではなく、どうあるべきかを考えることを介することなく現実に存在する自己意識でもあるのだ。つまり人倫的な実体はしきたりなのである。個々の意識が、個々の意識とは反対のものになっており、他の意識とひとつになって存在しているのは、個々の意識が、個々の意識として存在している自分は普遍的な意識なのだということを意識しているからに他ならないし、個々の意識のふるまいやいとなみが、普遍的なしきたりとなっているからに他ならない。

自己意識的な理性が現実化するということがどのようなことかの概念は以下のとおりだった。つまり、他の自己意識が自立したものとしてあるそのときに、自分がその自己意識と完全に統一されているということを直観するということであり、あるいは【２９０】、他の自己意識が私から自由な物的な対象として私の目の前に存在し、それが私の自己を否定するものとしてあるということそのことが、私が自分のちからで存在しているということでもあるということである。これが、自己意識的な理性が現実化するということの概念であるわけだが―その概念が実際に、あますところなく実在するようになったのは、古代ギリシアのポリスの市民の暮らしにおいてである。理性は流動的な普遍的な実体として存在している。それは、移ろうことのない物として存在するものではあるのだが、光が自分のちからで輝く無数の点である星に分散するように、互いに完全に独立した多くの存在に分散する。それらの存在は、ひとつひとつが絶対的に自分のちからで存在するものとなるのだが、その存在も、それらの存在から自立して存在する単純な実体のうちで解体することになる。しかも、そのものとして解体するだけでなく、解体がそれらの存在に自覚されてもいる。それらの存在が自分を個々の自立した存在として意識することができるのは、それらの存在がその個別性を犠牲にし、それと引き替えにあらわれる普遍的な実体がそれらの存在の魂となり本質となることによってなのである。が、普遍的な実体のほうもまた、個別的なものとして存在するそれらの存在のなす行為なのであり、それらの存在によってつくりだされた作品なのである。

個人のすることなすことは純粋に個別的なものであるが、それがむすびついている欲求も、自然的な存在としての個人が、つまり、存在する個別性である個人がいだく欲求なのである。そうした欲求を満たすという個人のこのうえなく低次元の機能でさえ否定されることなく現実をあたえられるということが生じるとすれば、それは、個人の自然的な存在を保持してくれる普遍的な媒体によってであることになるが、ポリス全体のもつ力はそうした媒体なのである。―しかし、普遍的な実体としてあるポリスにおいて個人が手にするのは、個人が個人として何かをなし続けることができるという形式だけでない。個人が個人として何をすればいいのかという内容も手にするのである。個人がおこなうことは、ポリスの市民の誰もが身につけている普遍的な技量の発揮であり、ポリスの市民全員がしたがっている普遍的なしきたりにのっとったことなのである。個人が何をなせばいいかの内容は完全に個別化されたものとしてあるが【２９１】、その限りで、その内容が現実にひとつのふるまいとなるとき、それはポリスの市民全員のふるまいへと組み込まれたものとなる。個人が自分の欲求を満たすためにおこなう労働は、その個人の欲求を満たすものであると同時に、他の個人の欲求を満たすものともなる。個人が自分の欲求を満たすことができるのは、他の個人がおこなう労働によってのみであることになる。―そのようにして個々の市民は、個別的な労働をおこないながら、無意識のうちに、普遍的な労働をおこなうわけなのだが、普遍的な労働を無意識におこなうだけではない。普遍的な労働を、その普遍性を意識しながら対象とすることもある。そのとき、ポリスの全体が

まるごと、その市民の作品となる。市民はその作品のために自分を犠牲にするのだが、そのことをとおして、その作品から自分自身をふたたび取りもどしもするのである。―ここには、相互的でないものは何も存在しない。そこでは、自立して存在している個人が、自分のちからで存在しているというそのあり方を解体し、自立していることそのものを否定するということがなされるが、それでもそのとき、自分は自分のちからで存在しているのだという肯定的な意味を個人が自分にあたえることがないような、そうしたことは何もおきない。そこにおいては、個人が他の個人に対して存在するということ、つまり、自分を他の個人に対して存在するひとつの物とするということと、個人が自分のちからで存在するというということとが統一されている。その統一がポリスという普遍的な実体であるわけだが、その実体が語る普遍的な言語が、ポリスの市民がしたがうしきたりなのであり、規則なのである。普遍的な言語という移ろうことのない存在で表明されているのは、個々の市民をポリスという実体に対立するものと見なすということばかりである。例えば、ポリスの諸々の規則において述べられているのは、個々の市民のそれぞれが何ものであり、何をなすものとしてあるかということである。けれども個人は、ポリスという普遍的な実体とは、普遍的なものが対象化して物のかたちをとって存在するようになったものだということを認識しているし、それだけではなく、それのうちに自分を認識してもいる。つまり、それが個別化したものが自分という個人なのであり、自分だけではなくて、ともにポリスの市民である誰もがそうなのだということをも認識しているのである。ポリスという普遍的な精神のうちに暮らす誰もが【292】、存在する現実のうちに見いだされるのは自分そのものにほかならないということだけを確信している。自分がそうであるように他の市民も、存在する現実のうちに自分そのものを見いだしていると確信している。―私がすべての市民のうちに直観するのは、市民のすべてが自分が自立した存在であることを自覚するのは、私が自立した存在であることを自覚するのと同時だ、ということである。私がすべての市民のうちに直観するのは、私という市民と他の市民たちとの自由な統一であり、その統一をつくりだしているのは他の市民たちであると同時に私という市民なのだということである。―ひと言でいえば、私は他の市民たちを私として直観し、私を他の市民たちとして直観するのである。

それだから、自由なポリスにおいては、理性がほんとうの意味で現実化している。理性は、今ここに存在する、生き生きとした精神となっており、そこでは個人は、自分の使命、つまり自分が何をなすべきものとしてあるかという自分の普遍的で個別的な本質を表明し、表明された本質が、ポリスの規則というような物のかたちをとって存在しているのを見いだしているだけでなく、自分が自分の普遍的で個別的な本質となり、自分の使命を果たしてもいるのである。それだから、古代ギリシアの賢者たちは、こう格言したのだった。「賢さや徳とは、ポリスのしきたりにしたがって生きることにある」と。

しかし、自己意識が精神であるのが、まだ、自分の本質を意識するということを介しておらず、概念によってでしかないとき、自己意識は、自分の使命を果たし、果たされた使命のうちに生きるという幸福から抜け出てしまっている。あるいは、自己意識はそうした幸福をまだ手に入れていない。どちらでもあるのはなぜかというと、どちらも同じように言えることであるからなのだ。

理性は、自分の使命を果たし、果たされた使命のうちに生きるという幸福から抜け出さなくてはならない。というのは、自由なポリスでの暮らしが、実在する人倫であるのは、そのものとしてのことでしかなく、自分の本質を意識するということを介していないからである。つまり人倫が、存在する人倫のままなのである。そのため、ポリスという普遍的な精神は個別的な精神のままであり【293】、しきたりや規則の全体は、規定された人倫的な実体のままなのである。実体がそうした制限を脱するのは、より高次の契機にあるとき、つまり、自分の本質を意識するときである。自分の本質を認識するとき、はじめて実体は絶対的にほんとうのあり方をする。そうしたプロセスを介さずに、存在のうちにとどまっているうちは、絶対的にほんとうのあり方をすることはない。そのようにして、存在のうちにとどまるとき、実体は制約された実体であるのだが、他方で、精神が存在という形式のうちにあるということは、精神にとって絶対的な制約であり、精神はその制約を脱しようとしないわけにゆかない。

個別的な意識とは、自分の本質を意識するということを介することなく、実在する実体つまりポリスのうちで暮らしているような意識であるわけだ

が、さらに言えば、その個別的な意識は、ポリスへの揺らぐことのない信頼を生きている。そこでは、精神が自分を諸々の抽象的な契機へと分解してしまうということがなされることはなかったし、それゆえ、純粋に個別的なあり方をしながら、自分のちからだけで存在するということも知られていない。しかし、意識はそうしたことを知らないわけにゆかないのであり、そのとき、そうしたことを知るということを介さずになりたっていた精神との統一や、意識における精神の存在、意識が精神へよせていた信頼は、すべて失われることになる。そのとき、自分のちからで孤立して存在する意識が本質となり、普遍的な精神は本質であることをやめる。確かに、自己意識が個別的なものとして存在するという契機は、普遍的な精神のうちに存在してはいる。しかし、消失する量として存在するだけなのである。それは、自分のちからであらわれたとたんに、意識のうちで直ちに解体してしまい、意識にのぼることはない。意識にのぼるのは、普遍的な精神への揺らぐことのない信頼だけなのである。自己意識が個別的なものとして存在するという契機が固定されるとき—どのような契機も、それが本質にそなわる契機であるからには、本質としてあらわれないわけにゆかないのである—個人は規則やしきたりに対立するものとしてあらわれることになる。そのとき、規則やしきたりは、個人にとって、絶対的な本質を欠いた空疎な観念でしかなくなり【294】、現実を欠いた抽象的な理論でしかなくなる。他方で個人は、ポリスの一市民としてではなくて、この私として、生き生きとしたほんとうの存在となるのである。

あるいは、自己意識は、人倫的な実体でありポリスの精神であるという幸福をまだ手に入れていないのである。というのは、精神は、自然を観察することから還ってきたばかりであり、精神として自分自身によって現実化されるということがまだなされていないからである。精神はまだ、内なる本質として、つまり抽象的なものとして立てられたところなのである。—つまり精神は、ようやく、他者とのかかわりを介することなく存在しているだけなのである。しかし、他者とのかかわりを介することなく存在するとき、精神は普遍的であることはできず、個別的な精神となる。精神は、自分の前にひろがる世界に目的をいだいて歩み入る実践的な意識となる。その目的とは、個別的なものという規定をおびている自分を二重化し、自分をこのものとして生みだしながら、つまり、自分を自分の目の前に存在する、もうひとりの自分として生みだしながら、そのようにして生みだした自分の現実が、もともと対象としてある存在と統一されていることを意識するという目的である。意識には、そうした統一が確信されている。意識にとっては、そうした統一はそのものとしてはすでに存在しているのである。つまり、自分と物としてあるものとはすでに一致しているのであり、その一致が自分をとおして自分に生じるだけでいいのであり、自分がおこなうこととは、いまだ存在しない統一をつくりだすことではなく、すでに存在するはずの統一を見つけることなのである。統一はすでに存在するのであり、それが意識に幸運として訪れるだけなのである。個人は、そうした幸運を探すために、自分の精神によって世界に送り出されるのである。

それだから、学的な立場にいる我々にとって、理性的な自己意識のほんとうのあり方であるのは人倫的な実体であるとすれば、いま自己意識がいるのは、そこへ向かう人倫的な世界経験の出発地点なのである。自己意識がまだ人倫的な実体になっていないという側面から考えれば、意識がおこなう運動は人倫的な実体へ向かっており、そしてその運動のさなかで廃棄されるのは【295】、自己意識にとって孤立したかたちであらわれる諸々の個別的な契機である。それらの契機は、意欲そのままの意欲という形式、つまり自然衝動という形式をもつ。自然衝動は、充足されると、その充足が新たな自然衝動の内容となるというようにして、どこまでもつきすすむ。—が、自己意識が人倫的な実体のうちにあるという幸福を失っているという側面から考えれば、そうした自然衝動には、自然衝動は真なる使命および本質を目的としたものだという意識がともなっている。人倫的な実体は自己を欠いた述語になりはてている。それらの述語の諸々の主語が生き生きとした個人であるわけだが、個人は自分の普遍性を自分で満たさなければならないし、自分の使命についての心配は自分でしなければならない。人倫的な実体によって個人の普遍性が満たされ、人倫的な実体によって個人に使命が与えられるということがないからだ。—それゆえ、前者の、自己意識がまだ人倫的な実体になっていないという意味では、意識の諸々の形態は人倫的な実体の生成であることになるし、人倫的な実体に先だつものであることになる。後者の、人倫的な実体のうちにあるという幸福を失っているという意味では、意識の

諸々の形態は人倫的な実体の後に続くものであり、何が自己意識の使命であるかを自己意識に明かしてくれるものであることになる。前者の側面から考えれば、人倫的な実体のほんとうのあり方が経験される運動においてなされるのは、衝動が衝動のままの衝動であること、つまり生（なま）の衝動であることをやめて、衝動の内容がより高次のものへと移行することであることなるが、後者の側面から考えれば、自分の使命を衝動のなかに位置づけようとする意識のいだく誤った表象が消えることであることになる。 前者の側面から考えれば、衝動が達成する目標は、意識を介することのない人倫的な実体であるし、後者の側面から考えれば、目標は人倫的な実体の意識であり、しかも、人倫的な実体が自分の本質であることを知っている意識である。そしてその限りで、その意識がくりひろげる運動は、意識を介さない人倫的な実体よりも高次の形態である道徳性の生成であることになる。とは言え、意識のそれらの形態は、人倫的な実体が生成するためのさまざまな側面のうちのひとつをかたちづくるものでしかない。【２９６】つまりそれは、自分のちからで存在するということに属する側面、つまり、意識が人倫的な実体という自分の目標を廃棄するという側面であり―それは、道徳性が人倫的な実体から生じるという側面ではないのである。が、それらの形態は、人倫的な実体が生成するための契機ではあるのであり、失われた人倫に対立しながら目的とされるべきものという意味をもちうるものではないから、それらの契機がもつ内容のひろがりを考えれば、それらの契機をここで扱うことに意味があるのは確かである。それらの契機が向かう目標は、人倫的な実体なのである。それなので、ここではこれから、それらの契機を扱うことにしたいのだが、それらの契機があらわれる形式としては、前者の形式のほうが我々の時代にしっくりくるのである。意識が人倫的な暮らしを失ってしまい、人倫的な暮らしを探し求めながら、前者の諸々の形式を繰り返しているのが、我々の時代であるからである。それだから、それらの契機を、そうした我々の時代に合わせた表現で表象してかまわないだろう。つまり、人倫的な実体の解体とともにあらわれたものを、いまだあらわれていない人倫的な実体をめざすものであるかのように表象してかまわないだろう。

　それなので、これから登場する自己意識は、ようやく精神の概念となったばかりで、精神の概念でしかない自己意識である。その自己意識がその歩みをはじめるとき、自己意識は、個別的な精神であることを本質とするという規定をもつものとしてあり、それゆえ、その自己意識は、個別的なものとしての自分を現実化し、現実化された個別的なとしてある自分を享受することを目的とする。

　自分のちからで存在するものであることを本質とするということが使命となるとき、自己意識にとって、自分以外の他者は否定されるべきものとなる。そのため、自己意識には自分自身が他者の否定とひきかえに肯定されるべきものとして意識され、他者は、確かに存在してはいるのだけれども、自己意識にとっては、そのものとして存在してはいないものという意味をもつことになる。そのとき自己意識は二つのものに分裂してあらわれる。つまり、目の前に見いだされる現実と、その現実を廃棄することをとおして自己意識が現実化する目的とに、である。現実化された目的が、廃棄された現実と入れ替わらなければならないのである。【２９７】しかし、（a）自己意識が最初に目的とするのは、自己意識が自己意識のまま、抽象的に、自分のちからだけで存在するということである。すなわち、ひとつの個別的な存在としての自分をそのまま他の自己意識として直観し、他の自己意識をそのまま自分として直観することである。（b）この目的がほんとうは何であるかを経験することによって自己意識の次元が高まる。自己意識が自己意識の目的であることに変わりはないが、あらたに目的となるのは、個別的であると同時に普遍的でもある自己意識である。この自己意識は法則を手にしているが、それは自分のこころがそのまま法則になったものである。（c）しかし、自分のこころの法則にしたがって生きようとする自己意識が経験するのは、個別的な存在を維持することは不可能であり、善は個別的な存在を犠牲にすることによってしか実行することができないということである。そのようにして自己意識は徳となる。徳が経験するのは、徳が目的とすることはそのものとしてはすでに実行されているということであり、幸福が直ちに行為そのもののうちに見いだされるということであり、行為そのものが善であるということである。この領域全体の概念は、物として存在するということは、精神が自分のちからで存在するということそのものなのだ、ということにほかならない。この概念が、この領域全体がくりひろげる運動がすすむにつれて、自己意識に対して生じる。それゆえ、自己意識がその概念を見いだすとき、

自己意識は自己意識にとって実在するものとなっている。そのとき自己意識は、自分そのままを表明する個人としてあらわれる。この個人は、自分に対立する現実にであっても、自分に抵抗するものをそこに見いだすことはない。この個人にとっては、そのままの自分を表明することだけが、目指すべき対象であり、目的なのである。【２９８】

a　快楽と必然性

自分にとって実在的なものとなった自己意識も対象をもつが、それは自己意識が自分のちからでようやく手にしている対象でしかないのであり、その対象は、まだ存在していないものなのである。存在は、自己意識が自分の力だけで手にした現実とは別の現実として、自己意識に対立している。自己意識が目指すのは、自分の力で存在するというそのあり方を貫きながら、自分を自分とは別の自立した存在として直観することである。それが自己意識の最初の目的となるのだが、それは、個別的な存在としての自分を他の自己意識のうちに意識するということである。すなわち、他者を自分へと変えるということである。自己意識は、他者がそのものとしては既に自分自身であることを確信している。—自己意識は、人倫的な実体から抜けだし、じっと静止したまま考え込むということからも抜けだし、自分の力で存在するというあり方へと自分を高めている。その限りで自己意識は、しきたりや暮らしにともなう規則や、自然の観察によって手に入れた知識や、その知識をもとにした理論を後にしている。それらのものは自己意識とっては、消えかけた灰色の影でしかない。というのも、それらのものは、自己意識とは別のものとして自分のちからで存在し、自己意識がもつ現実とは別の現実をもつものについての知だからである。知や行為が普遍的なものを目指すとき、そこでは個別的なものを感覚し享受することがやむことになるが、そうした普遍的なものをつかさどる天国の輝く霊にかわって、大地の霊が自己意識に入りこむ。この霊にとっては、個別的な意識の現実であるような存在だけが、ほんとうの現実なのである。ゲーテの『ファウスト』のフレーズをもじって言うならば【２９９】、

自己意識は、人間への至高の贈りものである
知性と学問を軽蔑し—
悪魔へと身をゆだね
身を滅ぼさずにはいられない。

自己意識は人生に飛びこむ。自己意識は純粋に個人として登場するのであり、純粋に個人として生きるということを実行に移す。自己意識は、自分の幸福を自分のために作り出すことよりも、それを直（じか）にもぎ取り享受することを選ぶ。自己意識とその現実のあいだには、学問、規則、原則といった影が漂ってはいるが、それは生命（いのち）のない霧であり、自分の実在性について確信する自己意識と張り合うことはできず消失してゆく。自己意識は生命をもぎ取る。もぎ取られるだけでなくて、もぎ取られることを自ら望んでもいた熟した果実が摘み取られるように、生命がもぎ取られるのである。

この自己意識がおこなう行為は欲望による行為なのだが、そうさせているのは、ひとつの契機である。つまり、自己意識は、すべての対象的な存在を否定しつくすことを目指すのではなく、否定は、対象的な存在が他者として存在しているその形式、つまり、対象的な存在が自立したものとして存在しているその形式のみに向かう、ということである。そうした形式は本質を欠いた仮象なのであり、否定されなければならないのである。意識がなぜそれの否定をめざすかというと、対象的な存在は、そのものとしては、自己意識にとって自分と同一の存在なのであり、そこに存在するのが自分自身だからである。欲望の場合、欲望とその対象とが没交渉に自立して存在するということをなりたたせている元素は、生きた身体である。食べる側も食べられる側も生きものである、というように。生きた身体が欲望の対象となる限りで、欲望の対象を享受することは、生きた身体を廃棄することである。しかしここでは、欲望とその対象とが分離した現実として存在するということをなりたたせている元素は、むしろカテゴリーなのである。もうすぐ見るように、統一や区別や関係というカテゴリーである。【３００】あるいはそれは、本質的に、ひとつの表象されたものとしてあるような存在である。個人がそれである。それだから、個人のひとりひとりを自分のちからで存在させているのは、自立ということの意識—自然的な意識でしかない意識でもいいし、諸々の法則からなる体系へと形成された意識でもいい—なのである。自分の

ちからで存在する個人というのは、そうした意識によって表象されたものなのである。しかし、そうした個人と個人との分離は、自己意識に対してそのものとして存在するものではない。自己意識は、他者が自分自身であることを知っている。分離が存在しないから自己意識は、快楽の享受へと至り、自立したものとしてあらわれる他の自己意識において自分が現実化していることの意識へと至り、自分と他者という二つの自立した自己意識の統一を直観するに至るのである。こうして自己意識は目的を達成するのだが、そのとき自己意識はその目的がほんとうは何であったかを経験することになる。自己意識は、自分は自分のちからで存在する個別的な存在であると理解していた。けれども、目的が現実化されると、その目的が廃棄されてしまう。というのも、対象である自己意識が、個別的なものではなくなり、自分自身と他の自己意識との統一となり、廃棄された個別的なものとなり、普遍的なものとなっているからである。

享受された快楽は、自己意識としての自分が自分の対象となっているという肯定的な意味をもってはいるが、同時に、自分自身を廃棄してしまうという否定的な意味ももっている。自己意識が自分が手に入れた現実を前者の肯定的な意味でしか理解しないとき、自己意識が経験したことは自己意識に矛盾として意識されることになる。つまり、個別的なものとしての自分が現実となるということが達成されたその時に、その現実が否定的な存在によって否定されるのを目にするという矛盾である。その否定的な存在は、【３０１】現実ならざるものとして、自己意識の現実に虚しく対立するものなのだが、それでもそれは自己意識を食いつくす威力としてあらわれる。この否定的な存在は、個人というのがそのものとして何であるかの概念にほかならない。しかし、ここでは個人は、まだ、自分を現実化する精神のもっとも貧しい形態なのである。というのも、個人なるものは理性によって抽象されたものでしかなく、自分のちからで存在するということと、そのものとして存在するということとがそのまま統一されたものでしかないからである。それゆえそれの本質は、ただの抽象的なカテゴリーなのである。けれどもそれは、自然を観察する精神にとってそうであったように、単純な存在のまま存在するという形式をもつものではもはやない。自然を観察する精神においてそれは抽象的な存在でしかなかったし、あるいは、よそよそしいものとして立てられた場合、物として存在するものでしかなかった。しかしここでは、物としての存在するということに、自分のちからで存在するということが入り込み、しかるべきプロセスを媒介するということが入り込んでいる。したがってそれは、たったいま見たように、単純な本質としての個人のあいだの純粋な関係としてくりひろげられたものを内容とする円環としてあらわれる。しかしその円環はまだ、諸々の抽象からなる円環でしかない。それだから、現実的なものとなるということを個人が手に入れるのは、個人が、諸々の抽象からなる円環を、単純な自己意識のうちに閉じ込めておくのではなく、自己意識に対して存在するという元素のうちへ、つまり対象的な広がりという元素のうちへと投げ出したときに他ならない。それゆえ、快楽を享受している自己意識にとって自分の本質としてこれから対象となることがどのようなことかと言えば、それは、空虚な本質でしかなかった個人が対象的な広がりをもち、個人と個人の純粋な統一でしかなかったものが対象的な広がりをもち、個人と個人あいだの純粋な区別でしかなかったものが対象的な広がりをもち、個人と個人との純粋な関係でしかなかったものが対象的な広がりをもつということである。個人が自分の本質として経験する対象は、それ以外の内容をもたない。それが、必然性と呼ばれるものなのである。必然性とか【３０２】運命というものは、それは何をなすものなのか、何がそれの規定された法則なのか、何がその肯定的な内容なのか、といったことを何も語ることができないものなのである。というのは、それは、絶対的な概念そのものではあるのだけれども、存在として直感された純粋な概念だからである。それは、個人と個人とのあいだの単純で空虚な、けれども、押しとどめることも妨げることもできない関係であり、それがおこなうのは、ひたすら、ひとが個別的なものとして存在することを否定するということである。個人と個人のそうした関係は、強固な結びつきである。というのは、結びつくものたちが、純粋な本質であり、空虚な抽象だからである。個人と個人のあいだの統一も区別も関係も、カテゴリーなのであり、そのどれもが、それそのものとして自分の力存在するものではなく、対をなす反対のものと関係することでしか存在できないのであり、そのためそれらのカテゴリーは離れ離れになることができない。それらは、その概念によって互いと結びついている。というのも、それらは純粋な概念だからである。そしてそれらのカテゴリーのあいだの絶

対的な結びつき、それらがくりひろげる抽象的な運動が、必然性をかたちづくるのである。個別的なものでしかない個人は、理性の純粋な概念だけを内容とするものなのであり、それゆえ個人がおこなったのは、死んだ理論からぬけ出して生命のうちと飛び込むということの代わりに、むしろ、自分が生命を欠いたものとしてあるということの意識のうちへと飛び込むことだったのであり、そのようにして個人は自分が、空虚でよそよそしい必然性でしかないことを、死んだ現実でしかないことを知らされるのである。

生じているのは、ひとつのものとしてあるという形式から普遍的なものとしてあるという形式への移行であり、ひとつの絶対的な抽象から他の絶対的な抽象への移行であり、他者との共同を投げ捨てて純粋に自分のちからだけで存在するという目的から、それとは純粋に反対のことへの、つまり、【３０３】純粋に反対のことであるがゆえに同じくらい抽象的にそのものとして存在するということへの移行である。それだから、個人はただ没落しただけのように思われる。個別的なものであることの絶対的な脆さが、それと同じ硬さをもちながらも持続するものとしてある現実に突き当たって砕け散っただけのように思われる。―が、個人は意識として自分自身と自分の反対との統一であるから、ここで生じている移行は、個人に自覚されている。自分が何を目的としたか、その目的がどのように現実化したかも意識されているし、意識にとって本質あったものと、そのものとして本質であるものとの矛盾も意識されている。―個人が経験したのは、個人がおこなったこと、つまり、自分の生命をもぎ取るということのうちにある二重性なのである。個人は生命をもぎ取った。そのとき個人はむしろそれと同時に死を握りしめたのである。もぎ取られた生命は自分の生命だったのだ。

それだから、生命あるものとして存在していたはずの自分が、生命のない必然性に移行するということは、個人にとって、何ものによっても媒介されない転換として生じたかのように思われるのである。媒介するものは、媒介される二つの側面がそこにおいて一つになるようなものでなければならないだろう。それゆえ、そこにおいて意識が、一方の契機を他方の契機のうちに認識し、自分の目的と行為を運命のうちに認識し、自分の運命を自分の目的と行為のうちに認識し、運命という必然性のうちに自分の本質を認識するような、そうしたものでなければならないだろう。ところが、そうした統一が意識にとっては快楽なのである。つまり、単純な個別的な感情なのである。自分の目的という契機から、自分のほんとうの本質という契機への移行は、意識にとって、反対のものへの純粋な跳躍としてなされるのである。というのは、それらの契機をともに含みながら結合するということは、快楽というような感情においてなされることではなく、普遍的なものである、つまり、考えることである純粋な自己においてしかなされないことだからである。

【３０４】それゆえ意識には、自分がほんとうの自分になるはずだった経験をとおして、自分がひとつの謎となるのである。自分がおこなったことから、自分がおこなったことそのものではないことが結果するのである。自分がそのものとしてそれであるところのものが、自分におきたことによって経験されるはずだったのに、そうならなかったのである。ここで生じている移行は、同じ内容や本質がただその形式を変えるということではない。つまり、意識の内容や本質として表象されていたものが、対象として表象されたものへ、つまり、自分自身の直観された本質として表象されたものへ、ただ形式を変えるということではない。ただ形式をかえただけのものでないがゆえに、抽象的な必然性としてあらわれたものは、普遍的なものがもつ否定的で不可解でしかない威力と見なされるのであり、その威力が個人としての自分を粉々にしたのだと見なされるのである。

自己意識のこの形態がどのようなあらわれをするかを見てきたところだが、そのあらわれは、意識が今いる地点に至るものとしてある。つまり、自己意識のこの形態のあらわれとなる最後の契機が、必然性のうちで自分を喪失したという考えであり、自分自身が自分にとって絶対的によそよそしい本質となっているという考えである。が、そのものとしては、つまり、学的な立場にいる我々から見れば、自己意識はその喪失を生き延びている。というのは、自己意識に自分を喪失させた必然性は、つまり、個人としての自己意識を粉々にした純粋に普遍的なものは、自己意識自身の本質だからである。意識が自分のうちに折れ曲がり自分のうちに還って、必然性が自分であることを知るとき、意識の新しい形態があらわれる。【３０５】

b　こころの法則、自負の狂気

自己意識の新しい形態には、必然性がほんとうは自己意識における何であるのかがわかっている。つまりこの形態においては自己意識自身が必然的なものとして存在している。自己意識は、自分のうちに存在するものがそのまま普遍的なものであることを、つまり法則であることを知っている。この法則は、こころの法則と呼ぶことができる。というのは、この法則は、意識が自分のちからで存在するということのうちにあるものそのままであることをその規定としているからである。意識のこの形態は、すぐ前の形態がそうであったように、自分のちからで個別的なものとして存在する本質である。けれどもこの形態は、前の形態よりも豊かなものとして存在する。というのは、この形態は前の形態とは異なり、意識が自分のちからで存在するということを、必然的なこと、つまり普遍的なことと見なすということをその規定としているからである。

それゆえ、そのまま自己意識の自己であるような法則、こころであるけれども法則をそなえたこころが、これから自己意識が現実化しようとする目的となるのである。そのさいに見られなければならないのは、目的の現実化が、目的の概念に対応したものとなっているかどうか、目的が現実化するさいに自己意識が自分の法則を本質として経験することになるかどうか、ということである。

こころは法則をそなえたものであるのだけれども、そのこころに、現実が対立することになる。というのは、こころにおいては、法則はようやく自分のちからで存在しているにすぎず、まだ現実化されてはいないのだが、それゆえ、同時に、概念とは別の何かになっているからである。概念とは別の何かは、概念とは別のものであることによって、ひとつの現実という規定をもつことになり、その現実が、現実化されるべきものに対立するものとしてあらわれるのである。そのようにして現実は一方では法則としてあらわれ、他方では個々の個人としてあらわれ、その二つのあいだの矛盾としてあらわれる【３０６】。つまりこの現実は、一方では、個々の個人を抑圧する法則となってあらわれ、世界のもつ暴力的な秩序という、こころの法則と矛盾するものとなってあらわれ―他方では、その秩序のもとで虐げられる人間となってあらわることになるのであり、そのとき人間は、こころの法則にしたがうのではなく、よそよそしい必然性に支配されることになる。―意識の目下の形態に対立するものとしてあらわれている現実は、すでに明らかであるように、意識の目下の形態に先行する関係にほかならない。つまり、個人とそのほんとうのすがたとが分裂するという関係であり、個人が残酷な必然性によって抑圧されるという関係である。が、先行する運動が、意識の新しい形態に先行するものであるのは、学的な立場にいる我々にとってのことなのである。それは我々が、意識の新しい形態がそのものとして、先行する運動から生じたものであるということを、それゆえ、意識の新しい形態を生じさせている契機は、意識の新しい形態にとって必然的なものとしてあるということを知っているからである。けれども、意識の新しい形態には、自分を生じさせている契機は、目の前に見いだされたものとして存在するだけである。意識の新しい形態は自分の起源についての意識もたないし、意識の新しい形態とって本質であるのは、自分のちからだけで存在するということ、つまり、既成事実としてある、そのものとしてあるものを否定しようとするということだからである。新しい形態の意識にとって、存在するものはすべて否定されるべきものなのである。

それゆえ、個人が目指すのは、こころの法則に矛盾する必然性を廃棄することであり、その必然性によって個人が被っている苦悩を廃棄することなのである。それだからこの個人には、個別的な快楽を求めた意識の先の形態が見せたような無分別さはない。あるのは、高次の目的を目指す真面目さである。真面目さゆえにこの個人は、自分が卓越した本性のもちぬしであることを表明し、人類の幸福を実現することのうちに快楽を追求する。【３０７】この個人が現実化しようとするのは法則であり、この個人が追求する快楽は、すべてのものたちのこころをみたす普遍的な快楽なのである。この個人にとって、快楽と法則の二つは分かつことができないものとしてある。この個人が追求する快楽は、法則にかなったものとしてあるし、全人類がしたがうべき法則を現実化することが、この個人に個別的な快楽を提供してくれるのである。というのも、この個人の内面では、個人と必然的なものとが、そのままひとつになっているからである。法則はこころの法則なのである。個人はまだ今いる場所におさまったままであり、個人と必然的なものという二つのものの統一は、二つのものを媒介する運動によって成り立ったものではないし、訓練によって成り立ったものでもないのである。自分の不作法な本

性そのままを現実化することが、自分が卓越性を表明し、人類の幸福を実現することなのだと見なされているのである。

それとは反対に、法則がこころの法則に対立するものとなるとき、法則はこころから分離されたものなり、自由に自分のちからで存在するようになる。その法則に従属する人間は、法則とこころとの喜ばしい統一のうちを生きることはない。そうした人間は、残酷な分離や苦悩のうちを生きるか、あるいはそれほどではないとしても、法則にしたがうときは、法則にしたがう自分自身を享受するということを欠いたまましたがい、そして法則に背くときは、法則に背く自分の卓越性についての意識を欠いたまま背くことになる。そうした暴力的な秩序は、神の名によるものであっても、人間の手によるものであっても、こころからは分離されたものとしてあり、そのため、そうした秩序はこころにとっては仮象でしかないのであり、その仮象がまだまとっている暴力と現実を仮象は失うべきなのである。確かにそうした暴力的な秩序が【３０８】内容において、偶然にこころの法則と一致するということがあるかもしれないし、そのとき、こころの法則がその秩序を許容するということは可能ではある。けれども、こころの法則にとって本質であるのは、純粋に法則にかなったものとしてあるということそこのことなのではなくて、こころがそこに自分自身を意識することができるということなのであり、こころがそこで自分をみたすことができているということなのである。が、普遍的な必然性の内容がこころと一致しないのならば、その必然性は内容においても無そのものであり、こころの法則に席を譲らなければならないのである。

それだから、個人はこころの法則を実行にうつすのである。こころの法則が普遍的な秩序となり、快楽が、それそのものとして自分のちからで法則にかなった現実となる。しかし、現実化がすすむにつれて、実際には、こころの法則が個人から逃げてしまう。こころの法則がそのまま、廃棄されるべきものとしてあった関係でしかなくなるのである。こころの法則は、現実化することによって、こころの法則であることをやめるのである。というのも、こころの法則は、現実化するにつれて、存在という形式を手に入れ、普遍的な威力となっており、その普遍的な威力にとって、ひとつひとつのこころはどうでもよいものとしてあり、その結果、個人は、自分の秩序を打ち立てることによって、それをもはや自分のものとは見なせなくなるからである。それだから、自分の法則を現実化することによって個人が生みだしたのは、自分の法則ではなかったのである。現実化したものは、そのものとしては、つまり学的な立場にいる我々にとっては、個人が現実化したものであるのだけれども、それが個人にとってはよそよそしいものとして存在している。それだから、個人がおこなったのは、自分が生みだしたそうした現実の秩序に自分を巻き込むということだったのである。しかも、その秩序は、個人にとってよそよそしいだけでなくて、敵対的に圧倒するものとしてあるのだ。―個人は、自分がおこなう行為によって【３０９】、存在する現実を成り立たせている普遍的な元素のなかに自分を置いたのである。というよりむしろ、自分をその普遍的な元素にしたのである。個人がおこなう行為は、それに個人が与えた意味によって、普遍的な秩序という価値をもつことになるのである。けれども、そのことによって個人は、自分を自分自身から自由にしたのである。個人は自分のちからで普遍的なものへと成長してゆくのであり、個別性を脱ぎ捨てながら、自分を普遍的なものへと純化してゆくのである。が、個人は、自分が自分のまま自分のちからで存在しているという形式のうちにしか普遍的なものを認識しようとしないのであり、それゆえ、個別的なものから自由になった普遍的なもののうちに自分を認識しはしない。他方では個人は、個別的なものから自由になった普遍的なものに従属している。というのは、その普遍的なものとは、個人がおこなっている行為に他ならないものだからである。そのため、個人のおこなう行為は、普遍的な秩序に矛盾するものとしてあるという転倒した意味をもつことになる。というのは、個人がおこなう行為は、個人の個別的なこころがおこなう行為であるべきものであり、個別的なものから自由になった普遍的な秩序であるべきものではないからである。が、実際には個人は、普遍的な秩序を拒むと同時に、それを承認してもいるのである。というのは、行為とは、自分の本質を個別的なものから自由になった普遍的なものへと現実化することであるという意味をもつものであり、つまり、行為がつくりだした現実を自分の本質として承認することであるという意味をもつものだからである。

現実としてある普遍的なものに個人が自分を従属させているのに、その普遍的なものが個人にたちむかってくるということを、その細部まで規定して

いるのは個人なのであり、個人にそうさせているのは、個人がおこなっている行為の概念なのである。そのことをあらためて確認しておこう。個人の行為が現実におこなっているのは、普遍的なものに従属することである。けれども、個人がおこなう行為の内容は、その個人のものでしかないものであり、それは、普遍的なものに対立する個別的なもののままであり続けようとする。けれども、個人がおこなおうとしているのは、自分のためだけの特定の法則を立てることではない。個別的なこころがそのまま普遍的なものと統一されたものとしてあるということは、もともとは個人のいだいた観念だったのだが、その観念が法則へと高められ、誰もが認めるべきものとなっているのである。つまり、あらゆるこころが、法則であるもののうちに【３１０】自分自身を認識しなければならないということになっているのである。しかし、その個人がおこなった行為が表現しているのは、その個人が自分のちからで存在するものとしてあり、その個人が快楽を享受したということなのであり、そうした行為において現実を手に入れているのは、その個人のこころでしかないのである。だが、その行為がそのまま普遍的なものとして認められるべきなのである。その行為は特殊なものなのであり、普遍的なものであるという形式をもっているにすぎないのだけれども、その特殊なものの特殊な内容が、特殊な内容のまま、普遍的なものとして認められるべきなのである。それだから、他の個人たちがその内容のうちに見いだすのは、自分のこころの法則が遂行されているということではなくて、他人のこころの法則が遂行されているということなのである。法則であるもののうちに誰もが自分のこころを見いださなければならない、という普遍的な法則にしたがって、他の個人たちは、その個人がうちたてた現実にたちむかうし、同じようにしてその個人は、他の個人たちがうちたてた現実にたちむかうことになる。最初に個人が自分の卓越した意図に反する嫌悪すべきものとして見いだしたのは、自分がこころの法則のままに行為することをじゃまする硬直した法則だけであったが、個人は今、人間たちのもろもろのこころそのものがそうしたものであるということを見いだしているのである。

さきの意識とはちがって、この意識は普遍性や必然性を知っているが、その普遍性はようやく普遍性そのままの普遍性でしかなく、その必然性はこころの必然性でしかない。そのためこの意識は、普遍性や必然性が現実化し効力をもつということがどういうことかを知らない。つまり、普遍的なものがそのほんとうのすがたで存在するとき、それは、この意識にとっての普遍的なものとしてあるのではなく、そのものとして普遍的なものであるものとしてあらわれる、ということを意識は知らない。意識は個別的なものとして存在し、個別的なものそのままであろうとして、そのために普遍的なものに自分をゆだねているのだが、意識のそうしたあり方が、その普遍的なもののうちでは没落することになる、ということを意識は知らない。意識がそのことを知らないがゆえに、個別的なものとして存在しようとしながら意識が手に入れるのは、自分が個別的なものとして存在するということの代わりに、自分を自分にとってよそよそしいものとするということなのである。そのよそよしいもののうちに意識は自分を認識することはないが、しかし、そのよそよそしいものは【３１１】もはや死んだ必然性ではなくて、普遍的なものとしてある個人によって生命（いのち）を与えられた必然性なのである。かつて意識の前にひとつの秩序が認めざるをえないものとしてあらわれたとき、意識はその秩序を、神の名によるものであっても、人間の手によるものであっても、死んだ現実として受け取った。自分のちからで存在し、普遍的なものに対立するこころとしてのみ生きようとした意識自身も、その現実に隷属したものたちも、その現実のうちに自分を意識することはなかった。ところが意識がいま見いだしているのは、すべてのものたちによって生命を与えられ、すべてのものたちのこころの法則としてある現実なのである。意識が経験しているのは、現実が生命を与えられた秩序としてあるということなのだ。そして意識がそのことを経験できているのは、実際に、意識が自分のこころの法則を現実化しているからなのである。というのも、ここでおきているのは、普遍的なものとしてある個人が自分の対象となっているということだからだ。ただ、意識がその対象のうちに自分を認識していないだけなのである。

そのため、自己意識のこの形態がおこなう経験のなかから、ほんとうのこととして自己意識のこの形態にあらわれてくるものは、自己意識のこの形態が自分のちからでそれであるところのものとは矛盾することになる。しかし、自己意識のこの形態が自分のちからでそれであるところのものは、自己意識のこの形態にとって、絶対的に普遍的なものとしてあるという形式をも

ったものとしてある。それはこころの法則という名の法則であり、その法則がそのまま自己意識とひとつのものとして存在しているのである。が、それと同時に、自己意識の目の前に存在している生き生きとした秩序もまた自己意識自身の本質なのであり、自己意識自身の作品なのである。自己意識はそうした秩序の他には何も生み出していないし、その秩序もまた、こころの法則と同じくらい、自己意識とそのままひとつのものとして存在している。そのようにして自己意識のありかたが二重化し、そのふたつが対立することになるとき、自己意識はそれそのものとして矛盾をかかえることになり、奥底から混乱することになる。【３１２】こころの法則において自己意識がおこなうのは、自分自身を認識するということだけである。すべてのものがしたがわないわけにゆかない普遍的な秩序は、こころの法則とは異なり、こころの法則が現実化することによって生じたものである。けれどもその普遍的な秩序もまた、自己意識にとっては、自己意識自身の本質であり、自己意識自身の現実なのである。それゆえ、ふたつは自己意識にはたがいに矛盾するものとして意識されるのだが、どちらも自己意識にとっては、自己意識の本質としてあり自己意識自身の現実としてあるという形式のうちに存在するものなのである。

自己意識が自分が没落しつつあることを意識し、没落という契機について口にし、没落こそは自分が経験したことの結果なのだと口ばしるとき、自己意識は自分にかんする以下のことを明かしている。つまり、内面において転倒が生じているということであり、意識にとって本質であるものがそのまま本質ならざるものであり、意識にとって現実であるものがそのまま現実ならざるものであるというような意識の錯乱が生じているということである。―ここで生じている錯乱を以下のようなものとみなしてはいけない。すなわち、本質ならざる何かが本質的なものとみなされ、現実ならざる何かが現実とみなされ、その結果、あるものにとっては本質的なものあるいは現実としてあるものが、他のものにとってはそうではない、というような錯乱、つまり、あるものを現実と見なす意識と、それを現実とは見なさない意識とが、あるいは、あるものを本質と見なす意識と、それと本質とは見なさない意識とが、別々の意識として存在している、というような錯乱とみなしてはならない。―実際に、あるものが、一般の意識にとっては現実的で本質的なものとしてあるのに、私にとってはそうではないというとき、私は、それを存在しないものとして意識しながら、同時に、私も一般の意識であるから、それを現実として意識してもいる。―そうしたふたつの意識が固定されながらひとつの意識へと統一され、対象が存在するものであると同時に存在しないものとして意識されることになると、それは一般に狂気と見なされる状態である。しかし、その場合【３１３】、意識とって錯乱したものとしてあるのは対象だけであり、意識そのものは、意識自身の内部でも、意識自身にとっても、錯乱はしていない。ところが、経験の結果としてここで生じていることにおいては、そうではないのである。法則のうちを生きている意識には、自分自身が現実的なものであることが意識されているのだが、同時に、自分の本質であるもの、自分の現実であるものが意識にとってよそよそしいものとなっているのである。自己意識としてある意識は、絶対的な現実としてあるはずなのに、その自分が、現実ならざるものとして意識されているのだ。意識はふたつの側面を、矛盾し合うものまま自分の本質と見なさないわけにゆかないのであり、それゆえ意識の本質は内奥から錯乱したものとなる。

そのため、人類の福祉を願うこころの高鳴りは、錯乱した自負のおびる凶暴さへと移行し、破壊にあらがいながら自分を保とうとする意識の憤怒へと移行することになる。そうした移行は、意識が意識自身の転倒したすがたを自分の外へと投げ出しながら、何が何でも、自分自身における転倒したすがたを他者のすがたとみなし、転倒しているのは他者なのだと主張することによっておこなわれる。それゆえ意識は、普遍的な秩序は、こころの法則をそれとは反対のものへと転倒させ、こころの幸せをそれとは反対のものへと転倒させたものなのであり、狂信的な僧侶や享楽的な暴君によって捏造され、そしてそうした僧侶や暴君からうけた辱めを自分たちよりも立場が下のものを辱め虐げることによって埋め合わせようとする僕たちによって捏造されたものであり、人類を裏切り、人類に言いようのない惨めさを味わわせるために用いられているものなのだと主張する。―自分もそうした錯乱のさなかにありながら意識は、そうした錯乱をひきおこし、転倒したすがたをさらしているのが個人にほかならないことを主張する。けれどもその個人とは、見知らぬ他人でしかないし、たまたま偶然にそうした個人であるのでしかない。けれども、こころこそは、つまり、意識が個別的なもののまま【３１４】

普遍的なものであろうとすることこそは、錯乱をひきおこしているものそのものなのであり、転倒したものそのものなのである。個別的なもののまま普遍的なものであろうとする意識の行為は、個別的なもののまま普遍的なものであろうとすることの矛盾を意識に意識させないではおかない。というのも、意識にとってほんとうのものとしてあるのはこころの法則であるわけだが―それはたんに思い込まれたものでしかなく、確固とした秩序のように、日の光を耐え抜いたものではなく、日の光にさらされると滅びてゆくものだからである。こころの法則は現実となるはずのものである。その意味で、こころにとっては、法則が現実となり、ひとびとがしたがう秩序となることが、目指すべき目標であり、本質である。ところが、こころにとっては、現実が、そして、ひとびとがしたがう秩序となった法則が、そのままただちに無価値なものでもあるのである。―同じように、こころがもつ固有の現実が、つまり、意識の個別的なあり方としてあるこころの自己が、こころにとって本質なのである。ところが、その現実をあらためて存在するものとすることがこころの目標なのである。それゆえ、こころにとっては、個別的ならざるものとしてある自己が、そのままただちに本質なのである。つまり、法則となることが、そしてその意味で、こころが意識にとってそうであるような普遍的なものとなることが、目標なのである。―こころのこうした概念は、こころのおこなう行為によって、こころの対象となることになる。それゆえ、こころの自己が経験するのは、こころが現実ならざるものとしてあり、現実ならざるものがこころの現実としてあるということである。それゆえ、ここでおきているのは、たまたま偶然に個人がそうしたこころをもっているとか、見知らぬ個人がそうしたこころをもっている、ということではないのである。こころなるものが、すべての側面において、すみずみまで、転倒したものであり、転倒をひきおこすものなのである。

けれども、個別的なもののまま普遍的なものであろうとする個人が転倒したものであり、転倒をひきおこすものであるだけではない。同じように、普遍的な秩序も、凶暴さをおびた錯乱が言い立てているような、それそのものとして転倒したものなのである。【３１５】普遍的な秩序とは、すべてのものたちのこころの法則であり、こころという転倒したものの法則だからである。ひとりのこころの法則が、他の個別的な存在からの抵抗にでくわすとき、普遍的な秩序とは、すべてのものたちのこころの法則であるのだということが明かされることになる。もろもろの確固とした法則が、ひとりの個人の法則によっておびやかされることがない、まもられたものとしてあるのは、それらの法則が意識を欠いた空虚で死んだ必然性ではなくて、精神をそなえた普遍的なものであり実体であるからなのである。普遍的なものが現実に存在するものとなるのは、普遍的なもののもとで生きるひとびとにおいてだけれども、そのひとびとが個人として生き、自分についての意識をもつのは、普遍的なものにおいてなのである。それなので、ひとびとが、あたかも秩序がひとびとの内なる法則に反するものであるかのように、とびとが秩序にたいして苦情を申し立て、こころが思い込んでいることを秩序に対抗させようとするときも、ひとびとは実際には、ひとびとの本質である秩序にこころから依存しているのであり、秩序がひとびとから取り去られたり、ひとびとが秩序の外に出ることがあったならば、ひとびとはすべてを失うことになるのである。公の秩序が現実として存在し、力をもつものとしてあるのはそのようにしてなのであり、それだから秩序は、揺らぐことなくつねに自分と同じものであり続ける普遍的で生き生きとした本質としてひとびとの目には映るし、個人とはその秩序がまとう形式であるかのようにひとびとの目には映るのである。―けれどもその秩序は、やはり転倒しているのだ。

なぜ転倒しているのかというと、その秩序がすべてのものたちのこころの法則であり、すべての個人がそのままただちに秩序という普遍的なものとなっている限りで、この秩序が現実に存在するものであるということは、自分のちからで存在する個人が現実に存在するということ、つまり、こころが現実に存在するものであるということでしかないからである。それだから、自分のこころの法則を生きようとする意識は、他者たちからの抵抗を経験することになる。なぜならば【３１６】、その法則と同じように個別的なものとして他者のこころの法則が存在し、その法則はそうした他者のこころの法則とぶつかることになるからであり、他者がこの意識に逆らいながらおこなうことと言えば、自分のこころを生きようとすることであり、自分に以外のものたちを自分のこころにしたがわせようとすることでしかないからである。それだから、ここに存在する普遍的なものとは、すべてのものたちが互いに抵抗し合うということ、すべてのものたちが互いとくりひろげる闘争でしか

ないのである。そこでは、あらゆるものが、自分の個別的なふるまいに自分以外ものたちをしたがわせようとするのだけれども、したがわせるには至らない。なぜならば、個別的なふるまいは、他の同じく個別的なふるまいの抵抗に出会うことになり、他の個別的なふるまいと解体しあうことになるからである。それだから、公の秩序に見えていたものは、そうした、すべてのものたちが互いとくりひろげる普遍的な闘争状態なのである。そこでは、あらゆるものたちが、自分にできることを自分のもとにかき集め、それにしがみつきながら、他者の個別的なふるまいに対して自分の正当性を行使し、自分の正当性を揺るぎのないものとしようとするが、その正当性も、他者が同じく正当性を行使することによって消滅してゆく。そうした秩序として世の中がある。それは果てしなく続く道のりであるかのように見える。けれどもそれは、普遍的なものであると思い込まれたものでしかないのであり、その内容は、むしろ、個別的なふるまいを揺るぎのないものとしようとしながらそれを解体するということをくりかえしているだけの本質を欠いた戯れなのである。

普遍的な秩序のもつ二つの側面を互いに対比させながら見てみることにしよう。後者の普遍的なものがその内容としているのは、静止することなく行動を続ける個人である。この個人にとっては、自分が思い込んだこと、自分の個別的なふるまいが法則であり、現実的なものは非現実であり、非現実的なものが現実なのである。しかしそれと同時に、この個人こそは、普遍的なものにおける現実性の側面なのである。というのも、秩序が現実的なものとして存在しているのは、自分のちからで存在する個人の存在によってだからだである。—普遍的なもののもうひとつの側面は、普遍的なものが静止した本質としてあるということである。けれどもそれは静止した本質であるがゆえに、内なるものとしてしか存在していない。それはまるっきり存在しないものであるのではないけれども、現実に存在するものにはまだなっていないのであり【３１７】、それが現実に存在することができるためには、自分こそが現実に他ならないと思い上がっている個人が廃棄されなければならない。意識が、それそのものとして真であり善なるものとしてある法則のうちで、個別的なふるまいをするものとしてではなく本質としてのみ存在するようになり、個人とは転倒したものであるとともに転倒をひきおこすものとしてあるということを知り、意識の個別的なふるまいは廃棄されなければならないということを意識するようになるとき、意識は徳という形態をとることになる。

c　徳と世の中

行為する理性における第一の形態では、自己意識は純粋に個人的なものとしてあらわれ、空虚な普遍的なものがそれに対立するものとしてあらわれた。第二の形態では、対立するそうした二つの部分のいずれもが、法則と個人としてふるまうことという二つの契機をそなえていた。しかし、対立する二つの部分のうちのひとつ、つまりこころでは、二つの契機がそのまま統一されていて、もうひとつでは、二つの契機が対立していた。ここでこれから見るのは徳と世の中との関係だが、そこでは、対立する二つの項のいずれもが、二つの契機の統一でもあり対立でもある。いずれの項も、法則と個人としてふるまうことという二つの契機のそれぞれが互いとくりひろげる運動なのである。ただし、くりひろげる運動は反対の方向を向いている。徳の意識にとっては法則が本質的なものであり、個人として行為することは廃棄されるべきものとしてある。それゆえ【３１８】、個人としてふるまうことは、世の中において廃棄されるべきものとしてあるだけでなく、同様に、徳の意識そのものにおいても廃棄されるべきものとしてある。徳の意識においては、個人としてふるまうことは、それそのものとして真なるものであり善なるものである普遍的なもののもとで規律をあたえられなければならないものとしてある。しかし、徳の意識のうちにも、自分という人格についての意識がまだ残り続けている。だが、ほんとうの規律とは、人格としての自分のすべてを犠牲にすることなのであり、個別的なふるまいが実際に何も残されていないということを証明することなのである。そのようにして意識において個別的なふるまいがすべて犠牲にされるとき、同時に世の中においても、個人としてふるまうことが廃絶されている。というのも、個人としてふるまうということは、意識と世の中との二つが共有する単純で分割できない契機だからであり、一方において廃棄されているが他方においては廃棄されていないということがありえないからである。—世の中においては、個人として

ふるまうことは、徳をもった意識のうちにあるときとは反対のものへと転倒させられている。つまり、自分を本質とするのであり、それそのものとして善であり真なるものであるものを自分に従属させるのである。―さらに世の中は、徳にとっても、個人としてのふるまいによって転倒させられた普遍的なものであるだけではない。絶対的な秩序も、徳と世の中とが共有する契機なのだが、これが世の中においては、意識にとって現実に存在するものとして存在しないだけでなくて、意識の内なる本質のままなのである。が、だからといって、絶対的な秩序は、もともと徳によって生み出されなければならないものとしてあるというわけではない。というのも、生み出すということは、行為としてなされることであり、個人としてふるまうということが意識されているということなのであり、個人としてふるまうことは、むしろ廃棄されるべきものだからである。しかし、個人としてふるまうことを廃棄することによって世の中のそのものにもたらされるのは、やはり、世の中のそのものがそれそのものとして自分のちからですがたをあらわすための空間でしかなく、内容ではないのである。

けれども、世の中が現実に存在するさいの普遍的な内容は、既に生じている。もう少し詳しく言うと【３１９】、その内容とは、さきにａとｂで自己意識がおこなった二つの運動に他ならない。その二つの運動から徳が生じたのである。その二つの運動が徳の源泉であるので、徳の目の前にはその二つの運動が存在している。けれども徳が目指すのは、徳のそうした源泉を廃棄し、自分を実現することである。すなわち、自分のちからで自分になることである。さきに自己意識がおこなった二つの運動が世の中の内容であるから、世の中は、一方では、快楽とその享受を求めてなされる個人の個別的なふるまいである。そのふるまいは自分が没落するのを見いだし、みずからの没落によって普遍的なものを満足させる。けれども、その満足そのものは、この関係をかたちづくる他の契機がみなそうであるように、普遍的なものの転倒した形態であり運動である。たとえば、意識にとって現実であるのは、個別的な快楽とその個別的な享受だけだが、それは普遍的なものに逆らおうとしてなされたことなのである。意識が経験する必然性にしても、普遍的なものの空虚な形態でしかなく、快楽と享受を求めたことへのただの否定的な反作用であり、行為の内容となるべきものを欠いている。―世の中のもうひとつの契機は、それそのものとして自分のちからで法則であろうとして、そうした自分のすがたを空想しながら、現存する秩序を破壊しようとしてなされる個人のふるまいである。確かに、普遍的な法則は、自分はそれそのものとして自分のちからで法則であろうとしているのだという自負に逆らうものとしてあらわれている。それはもはや、意識に対立する空虚なものとしてあらわれてはいないし、死んだ必然性としてあらわれてもいない。それは意識自身における必然性としてあらわれている。しかし、そこでおこなわれているのは、絶対的に矛盾する現実を結びつけるということを意識がおこなっているということであり、そこにあるのは錯乱である。が、そうした錯乱が意識にとって対象的な現実となってあらわれるとき、それは転倒と呼ばれる。それゆで、普遍的なものは【３２０】二つの側面のいずれにおいても、それらの側面を支配する力としてあらわれているのだが、その力がどのように存在しているのかと言えば、何もかにもが転倒させられ、転倒したものとしてあらわれるという、普遍的な転倒としてのみなのである。

普遍的なものは徳から、ほんものの現実を受け取らなければならないのだが、それがなされるのは、個人が個人としてふるまうという転倒の原理であるものを廃棄することによってである。徳が目標とするのは、そのことをとおして、転倒した世の中をもういちど転倒させながら、世の中のほんとうの存在を生み出すことである。そうしたほんとうの存在は、世の中においては、ようやく世の中のそのものとして存在しているだけであり、まだ現実的ではない。それだから徳もそれを信じているだけである。徳は信じているだけのものを、目に見えるものへと高めなければならないのだが、しかしそれは、徳が労働や犠牲にたずさわり、その果実を享受するということをともなうことはできない。というのは、徳が個人としてふるまうことである限りで、労働や犠牲の果実を享受しようとするとき徳は、世の中との闘争を始め、闘争という行為をおこなうことになるからである。しかし、徳の目標が達成され、徳がほんとうに存在するのは、世の中の現実に打ち勝つときなのである。世の中の現実に打ち勝つことによって、善なるものの存在がもたらされるとき、徳が行為をおこなうことは廃棄される。つまり、個人としてふるまっているという意識は廃棄されるのである。―その闘争がどのように続いてゆくのか。徳はその闘争の中で何を経験するのか。徳が犠牲を引き受けることに

よって、世の中が屈服し、徳が勝利を手にすることになるかどうか。―そうしたことは、闘争をおこなう者たちが携える生き生きとした武器の本性によって決定されなければならない。というのも、武器とは、闘争する者たち自身の本質に他ならないからである。武器は、互いに敵として向かい合う彼らだけにすがたわあらわす彼ら自身の本質なのである。彼らが手にしている武器は、闘争のうちにそれそのものとして存在しているものから、彼らがそれを手にする前に既に生じていたものなのである。【321】

徳をもつ意識にとってほんとうの普遍的なものであるのは、意識が信じている普遍的なものであり、それそのものとしてある普遍的なものである。つまりそれは、まだ現実の普遍的なものではなく、抽象的な普遍的なものなのである。普遍的なものは、徳をもつ意識そのものにおいては、意識が目指す目標として存在し、世の中においては、世の中の内なるものとして存在する。そうした規定をもつために、普遍的なものは、徳においても、世の中にとってあるのと同じものとしてあらわれる。つまり、徳にとって善なるものは何よりも実行しなければならないものであり、現実と呼ぶことができるものではまだないのである。徳がそうした規定をもつものとしてあるということがどういうことかを考察するときわかるのは、善なるものは、それが世の中に対する闘争としてあらわれる限りで、他者としてあらわれる、つまり、それそのものとして自分のちからで存在してはいないものとしてあらわれる、ということである。というのも、もし善なるものがそれそのものとして自分のちからで存在するものであるならば、自分に反対するものをねじ伏せることによってしか自分のほんとうのすがたを自分に与えようとしないということはしないからである。善なるものが、まだ他者に対して存在するものでしかないということが意味するのは、先ほど善なるものについて今とは逆の考察をしたときに、つまり、善なるものが徳にとって何であるかを考察したときに示されたことと同じことである。つまり、善なるものはまだひとつの抽象なのだということである。善なるものは他者との関係のうちに存在するだけであり、それそのものとして自分のちからでは実在してはいないのである。

それゆえ、ここですがたをあらわす善なるもの、つまり普遍的なものとは、素質、才能、能力と呼ばれているもろもろのものである。それは精神的なもののひとつのあり方であり、そこでは精神的なものはひとつの普遍的なものとして思い浮かべられるのだが、その普遍的なものとは、生命を与えられ、運動をおこなうのに、個人としてふるまうという原理を必要とし、個人としてふるまうときに現実のものとなるような普遍的なものなのである。その原理が徳の意識においてはたらくときは、普遍的なものはその原理によって、善い用い方をされるのだが、その原理が世の中ではたらくときは、普遍的なものはその原理によって悪用されることになる。―【322】つまり、普遍的なものは、自由にふるまう個人の手によって支配される受動的な道具となるのである。その道具は、自由にふるまう個人によって自分がどのように使用されるかについて無関心であり、普遍的なものを破壊するような現実を生み出すために悪用されるということもありえるのである。それは、生命を欠き自立性を欠いた素材であり、どのようにでも加工されることがあるものであり、みずからを破滅させるようなものにさえ加工されうることがあるものなのである。